

魂 プロの背中

ベトナム人はおしなべて家族愛が強い。誰かが病気になるべく、病院通いの付き添いを仕事に優先させるのは、ごく普通だ。

3月10日、ハノイの国立眼科病院で服部匡志(47)が診察した男性も、働き盛りの息子が一緒に診察室まで入ってきて、服部に「失明させないで」と手を合わせた。そんな光景に接する時、服部は、回り道だらけの人生の支えとなった自身の父親を思い浮かべることがある。

服部の父、敏郎は胃がんを患い、48歳で亡くなった。死の直

回り道父の言葉支えに

前、高校生だった服部は、医師が「あの部屋の患者、文句が多いな。もうすぐ死ぬのに」と看

海を渡る赤ひげ ③

病院の廊下で手術を待つ患者やその家族のそばを通り診察室に向かう服部さん。夜遅くまで手術予定が入っている(3月、ベトナム・ハノイで)



ご感想を、〒530・8551(住所不要)読売新聞大阪本社社会部へお寄せください。ファクスは06・6361・0733、メールはosaka2@yomiuri.comです。

職員として路上生活者の世話に明け暮れ、「人の役に立つ仕事をしろ」が口癖だった。

「俺は医者になって、おやじのような人を助ける仕事をしよう」。服部は心に決めた。

だが、すんなりとはいかなかった。服部は敏郎の死を引きずって一時不登校となり、医学部受験に失敗。浪人して毎日14時間以上勉強したが、来る年も来る年も不合格が続いた。

ついに4浪。さすがに別の学部受験も考えたが、敏郎の口癖を思い返し、踏ん張った。5度目の挑戦で京都府立医大に合格した時、22歳になっていた。

人生の曲折は、まだ続く。アルバイトに精を出し過ぎたこともあって留年。指導教官の人柄にひかれて眼科に進んだ後は、腕を磨こうと医局の系列病院で

がむしやらに手術の機会を求めたが、「調子に乗るな」と煙たがられ、干された。

服部は医局を飛び出し、地方の病院を渡り歩いて手術を重ねる「武者修行」を選ぶ。ベトナム通いのために勤務医をやめてからは、眼鏡店で客のコンタクトレンズ合わせをするアルバイトでしのいだ時期もある。

つらいことは多いが、くじけず信念を貫き、腕を磨いて来られたのは、父の言葉があったからだ。そんな服部だからこそ、多難なベトナムでの無償医療活動を続けられるのだろう。

「頭も要領も悪い。はぐれ者の医者やけど、おやじの気持ちには背かない人生を歩んできた。何とか人の役には立ってるつもりやで」。そう言い、服部は口ひげをなでた。(敬称略)